

C. B. ブラウン『ウィーランド』を読む^{*1, 2} —— 合理主義的解釈に対する一批判 ——

瀬戸山 徹二郎

A Reading of C. B. Brown's *Wieland*
—— A Criticism of Rationalistic Interpretation ——

Tetsujiro Setoyama

The historical importance of Charles Brockden Brown has been too much emphasized by many critics of American literature. Brilliant titles such as the father of the American novel, the first professional writer and a forerunner of the American Renaissance have been put upon this dark-oriented Gothicism. His works, however, six in all except incomplete ones, haven't been studied so much as we would expect from his fame.

The following is a reading of his most famous work, *Wieland; or The Transformation — An American Tale* (1798) as a manifestation of Brown's attitude against the contemporary sensational psychology and empiricism. Contemporary ideas by which the major characters attempt to live are tested by a series of mysterious events. They put too much reliance on their senses and their deduction from sensory evidence is quite wrong. It could be said that one of Brown's aims in this novel might be to show that man is easy to be misled by appearances and that truth is hidden under them.

I

アメリカ文学史に占める C. B. ブラウン (1771—1810) の重要性は従来過度なまでに強調されてきた。アメリカ最初のプロの作家であるとか、アメリカ小説の父であるとか、約50年後に現れるポー、ホーソン、メルヴィル等の先駆的役割を果たしているとかいうような指摘は、ブラウン研究家の殆んどによってなされている。しかし作品そのものの研究は名声のわりには軽視されてきたと言えよう。1971年ブラウンの生誕200年祭を記念して、ケント州立大

学から Bicentennial Edition が刊行され始め、それを契機に各作品が一段と研究されるようになったが、未だ充分とは言えない。

拙論はブラウンの代表作 *Wieland or the Transformation — An American Tale* についての一つの読みである。すなわち18世紀末のアメリカおよびヨーロッパの時代思潮に同調せず、それに反発した作品としてこれを説もうとするものである。

*1 水産大学校研究業績 第1157号, 1988年1月13日受理。

Contribution from Shimonoseki University of Fisheries, No. 1157, Received Jan., 13, 1988.

*2 本研究報告は、日本英文学会第36回九州支部大会(九州大学, 1983年11月12日)で発表したものに加筆した。

II

この作品は正体不明の声を中心に展開する。前後7回聞こえる声が物語の発端でもあり、その後の出来事に重要な関わりを持っている。つまり聞こえた声を3人の主人公達がいかに判断するかがこの作品の中心的問題となっている。

ところで、正体不明の声を究明しようとする場合、その声の特徴とか持続時間、聞こえた場所、聞いた場所等も関連するのだが、この作品ではそれらはほとんど問題にされず、したがってここでも声の聞き手の側の反応のみを検討することとする。ただ次の二点だけは特に指摘しておきたい。一つはこの作品の舞台がフィラデルティア郊外の農場であり、ごく限られた人達のみで構成された、言わば小さな閉鎖社会であるということである。いや客観的にみれば、「都市が近くにあり、そこにいる何千人という人達の能力や目的を考えれば、この事件のどんな不可思議も解ける」⁽¹⁾ほどには開かれているのだが、主人公達には不特定多数の人間がこの農場に侵入することは到底考えられないこととなっている。場にたいする彼等の閉鎖性が、謎の声を特定しようとする場合に、誤った判断を生み出す一つの原因になっていると言えよう。もう一つはこの謎の声の主であるカーウィン (Francis Carwin) という人物についてである。カーウィンが穏やかな生活を送っている3人の男女を、言わば実験台の皿上に載せ、その反応を見ようとしたことや、知的で好奇心にあふれた男性である点、更に、アメリカ生れでありヨーロッパ (特にイタリア) において悪にそまり、その後帰国した点等は、その後の作家たちの多くの作品にみられる要素であり、彼はその原初的人物として注目に値する。またこの作品の中で彼が果す役割も決して小さくはない。彼を真の主人公としてこの作品を讀もうとする評者もいる。⁽²⁾しかし所詮は腹話術という奇抜ではあるが単純なトリックの仕掛人という役割にすぎない。リンジも述べているように、⁽³⁾序文の中で言及されている *Carwin, the Biloquist* という回想録が未完のままに終わったことをみても、作者の主たる関心がここになかったことが伺われる。またジフも“Carwin … never achieves existence”と言っているように、⁽⁴⁾やはり影の人物として扱うのが至当である。よってここでは考察の対象とはしない。以下、この作品の主要人物セオドア (Theodore Wieland) とその妹クララ (Clara Wieland) およびセオドアの義兄にあたるブレイエル (Henry Pleyel) の3人がこの謎の声にたいしていかに反応するかをみることにする。

フィラデルティア郊外の農場での穏やかな楽しいウィー

ランド一家の生活は一つの不可解な声によって突然張りつめた雰囲気包まれる。5月のある夕方、一家はいつもの聖堂で時を過していたが、俄雨のために家へ追いやられる。しかししばらくして、イギリスの友人からの手紙をそこに置き忘れたことに気づき、セオドアがそれを取りに出かけるのだが、聖堂への坂を登りかすけた時に次のような大声の言葉を聞く。

Stop! Go no farther. There is danger in your path.

それは彼の妻キャサリン (Catherine) の声のように聞こえたのでそのことを確かめると、

Yes, it is I; go not up; return instantly; you are wanted at the house. (p. 33)

という言葉が返ってくる。家に帰ってそのことを確かめると、キャサリンはずっと家にいたことを皆が証言するのである。それを知ったとき、セオドアは次のように言う。

“Your assurances,” said he (Theodore), “are solemn and unanimous; and yet I must deny credit to your assertions, or disbelieve the testimony of my senses, which informed me, when I was half way up the hill, that Catherine was at the bottom.” (p. 32, underlines, mine)

下線部の断定的な表現に注目したい。彼はクララ達の主張を否定するか、自分の感覚を信じないかのどちらかであると言う。彼らの主張と自分の感覚が知らせるものとが同じ重みで受けとめられ、前者と同様に後者に対しても疑念はないのである。実際にはその声の主がキャサリンだったのか、また言われた内容がその通りだったのかは相当に曖昧な状況のなかにあった。殆んどまったくの暗闇の中での出来事であり、声が発せられた場所は彼が居た場所からかなり離れてもいたのだから。しかし彼は、聞いたという事実にも、聞いた内容にも、また聞いた直後に下した自分の判断にもまったく疑いをさしはさむことをしない。彼の感覚 (経験) 重視と独断へ走る傾向はこの最初の段階で明白である。この傾向は彼の他の特徴とも関連している。

セオドアという人物は次の引用でほぼ明らかである。

In his studies, he pursued an austerer and more arduous path. He was much conversant with the history of religious opinions, and took pains to ascertain their validity. He deemed it indispensable to examine the ground of his belief, to settle the relation between motives and actions, the criterion of merit, and the kinds and properties of evidence. (p. 23, underlines, mine)

彼の特徴は物事の真相を追求し、検討し、確かめ、そして全てははっきりと決着をつけようとするにある。特に

古代ローマの雄弁家キケロの原文を決定し、その純化、復元に最大限の努力を重ね、そこから最高の喜びを得ている。前述の手紙を取りに聖堂へ戻ろうとしたのも、手紙の中にあるモノンガヒーラ河の瀑布の描写の真実性が疑われ、それを確認しようとしたためであったし、その直前にはラテン語の誤用も議論されている。また、サクソニーにある歴大な領地が彼に譲られそうになっても、彼はヨーロッパへ渡る船旅の危険と、相続の不確実性と、その間に家族に与える不安を理由に、ブレリエルの執拗な勧めにもかかわらず、断固としてその相続を拒否する。安全、明白、確実を求め、不安定、曖昧を著しく嫌うという彼の一面がここに如実に表れている。彼のこのような性格は恐らく彼の幼児体験にその因を求めることが出来よう。彼が8才の頃、独りよがりの宗教に凝っていた父が急死する。その様子はセオドアとクララが成人した後に彼らの叔父から科学的に説明されるのだが、幼い頃の言わゆるタブラ・ラサの状態にあった彼らには、何よりもその不可解さの故に消し難い印象を残し、以後何かにつけてこの事件を想起することになる (p. 19)。そしてその事件の神秘性と曖昧性がセオドアを一層明白な真実を求める方へと駆りたてるのである。⁽⁵⁾

最初の声を聞いた後3週間程経て、セオドアは今度はブレリエルと前述のヨーロッパ行きの件を議論している時に、ふたたびキャサリンの声を聞く。そして先日の自分の体験がブレリエルから非難されたような空想ではなかったことを確かめる。その後、諸々の事実を反芻して考え込む傾向が一層強くなり、彼はこの主無き声というディレンマと曖昧状態からの脱却を図る。妻の声を聞いたという経験と、妻はそこにはいなかったという周囲の証言との二律背反を明快に解決するために、彼は神という超自然的存在を導入する。それは言わば彼の頭の中での合理化である。つまり曖昧のままに放置することは性格的に許されず、相反する事実のどちらをも否定することなく、合理的説明をつけようとするなら、あの声が神のものであったと断定する以外に方法は無かったと言えよう。

この作品は序文にあるとおり、クララが少数の友人に宛てた手紙という形式で書かれている。そして裁判所でのセオドアの発言記録の部分 (第19章) 以外は全てクララの視点を保って書かれている。従って当然のことながら、語り手の心の動きはたっぷりと言き込まれている。しかしチェイスが言う "point of command"⁽⁶⁾ を持つまでに到っておらず、その他の人物については言動や顔の表情のみで、内面の動きは殆んど述べられていない。2回の声を聞いた後、架空の神の声を聞くまでのセオドアの心の軌跡を説者

がたどるには、兄にたいする語り手の推測的表現と第19章の告白しかないのである。ともかくこの間のセオドアについての描写は不十分であり、ジフがセオドアの狂気を指して、"a leap than a development"と云うのももっともである。⁽⁷⁾

その後セオドアは自分の下した判断が正しいのかどうかを確かめるために、神の出現を烈しく求めるようになる。その烈しさは次の引用で明白である。

My days have been spent in searching for the revelation of thy will; but my days have been mournful, because my search failed. I solicited direction: I turned on every side where glimmerings of light could be discovered. I have not been wholly uninformed; but my knowledge has always stopped short of certainty. Dissatisfaction has insinuated itself into all my thoughts. (p. 165)

父が死ぬ時の状況や死ぬ前に母に語った言葉にも暗示されているが、彼は父の死にも神の介在があったのではないかと考えている。それはクララの場合も同様であり、「聖なる支配者」が人事に干渉したのではないかと疑う。幼年時代のこの事件から現在まで神の顕現を常に求めてきたが、神はいつも遠くにあり、不確かで、彼を満足させるものではなかった。しかし今回のこの声は自分の耳で聞き、ブレリエルにも確認してもらったものである。自分の感覚に絶対的自信を持っている彼はその声が待ち望んでいた神のものであると判断し、その確認を求めて、今度はキャサリンの声ではなくて、神自らの声を更に烈しく求めるようになる。しかも「神が存在なさるといふ明白な印が私の感覚に映りますものなら。」(p. 167)と云って、聴覚のみならず視覚による確認をも求める。そして遂に目くらむ光輝の中で神を見て、次の命令を聞くのである。

They prayers are heard. In proof of thy faith, render me thy wife. This is the victim I chuse (sic). Call her hither, and here let her fall! (p. 168)

しかし「見た神を描写することは許されてもいないしその言葉もない」と後日の告白の中で述べている如く、セオドアは神の客観化を拒否する。また神の姿はセオドアの体じゅうの機能が停止した状態の中で見たものであると彼自身が認めている。聞こえた声はカーウィンの腹話術によるものではない。声も姿もすべて彼の幻覚なのである。

精神的に落ちついた日常生活の中に突如不合理な嵐が起り、過去の似たような事件からの連想がその嵐を増幅する。次には精神的安定への復帰願望が強まり、神を導入するこ

とでその不合理性に解決を与える。更にそのような解決の正当性を確かめるために、神が実在するという確証を求め、遂に自分の中に神を創造してしまう。セオドアが不可解な声を聞いてから神の命令を聞くまでのプロセスは以上の通りであろう。それは彼にとっては合理的思考の必然的結果であった。それ故に彼は神の出現とその命令を躊躇なく受け入れたのであり、そのような大きな犠牲を要求したことに対して神に感謝さえるのである。またそれ故に、全てが判明した後でも彼は欺しの元凶であるカーウィンにたいしては、クララとは対照的に、まったく怒りを感じないのである。裁判での告白の中にみられる自分の行為の正当性にたいする合理的主張は、彼が再び精神的安寧を得たことを示している。その彼が遂には自殺へと追い込まれるのは、それまでに耳にした声が全て偽りの声であり、感覚が狂っていたことを知らされるからである。

Man of errors! Cease to cherish thy delusion: not heaven or hell, but thy senses have misled thee to commit these acts. Shake off thy phrenzy, and ascend into rational and human. Be lunatic no longer." (p. 230)

全ての土台となっていた感覚が誤りを伝えていることを知らされ、彼は死という形で自分を否定せざるをえなかった。そしてこの誤りを知らせるのもまたカーウィンの腹話術による声であった。

この妻子殺害という眩目すべき事件を作品の中心に据えて、そこから作品のテーマを引き出している研究者もいる。その代表的な例がクラークであり、彼は次のように述べた後に、当時のペンシルベニア州には奇妙で狂気じみた宗派が多数あって、この作品はそれらの宗派がもたらす結果にたいする抗議であり、また宗教的狂気や信じ易さにたいする戒めであると言う。

As the title suggests, Wieland has been transformed from a man into a very beast by the power of "creed" religion. It is this religious theme of the story that is most gripping, and about which the reader's memory clings longest. Indeed, the whole novel is directed toward that end.⁽⁸⁾

セオドアがああ残虐行為に走るのは適切で十分な宗教教育がなされず、"creed religion"の力によって狂人になったせいであるとするのである。⁽⁹⁾

しかしこのような読み方には以下の2つの理由で筆者は賛同出来ない。第一に、セオドアに関する話はこの作品全体の半分位を占めるにすぎず、他の半分はクララ、ブレイエル、カーウィンの三者の恋に関するものであり、セオド

アは殆んど無関係と言ってもよい。第二に、セオドアの妻子殺害を中心に据えることは必然的にこの作品をゴシックとして読むことにつながるが、作者がゴシック的情動を読者に喚起することを主たるねらいにしたとは思われない。何故なら作者はそのゴシック効果をもっとも生み出し易い個所で描写を止めているからである。つまりセオドアの告白記録をクララが読むのを途中で放棄していることを指しているのだが、あのまゝクララが読み続けていたら、読者の心にもっと強烈な恐怖を喚起することが出来ただろうと思われるのである。その後に行ったであろう5人の子供の殺害場面の描写は1行も見当たらない。ゴシック効果を読者に与えるのを作者はこの程度で抑制しているのである。作者がゴシック的要素を作品の中に持ち込んだのはそれ自身の目的よりも読者の注目を惹くという目的のためではなかったのか。彼はアメリカで最初の職業作家になろうとした。18世紀末の新興国アメリカにあって、国民が未だ小説を読むだけの時間的・精神的余裕を持ち得ない状況の中で、作家として生計を立ててゆくには可能な限り多くの読者を獲得する必要があった。その為に彼は当時の首都フィラデルフィアを舞台にして、その当時もっともポピュラーな2種類の小説——ゴシック小説とリチャードソン流の感傷小説——のどちらの要素をも作品に投入することによって読者を獲得しようとしたのだと推測できる。読者の反応を大いに気にしていたことは序文の1行目を読んだだけでも明白である。ともかく、作品の半分ではゴシック的手法が多用され、ゴシック的雰囲気の中でゴシック的事件が起るのだが、その全貌は読者には伝えられず、途中で留められている。そして他の半分ではゴシックは影をひそめ、男女間の激しくまた微妙な心の動きが中心となっている。それ故に一方のテーマでもって他方をも包括するテーマとすることは出来ない。

セオドアが自ら創造した神が何故彼に "the butcher of (his) wife" (p. 168) になることを命じたのか。更にその後子供をもいけにえとして要求したのか。このようなプロットを作者に思いつかせる一つの大きな原因は作者自身の宗教に対する態度にあると思われる。主題から少しそれるが、このことについてここで述べておきたい。ブラウンが生れ育ったペンシルベニアは、周知の如く、ウィリアム・ベンによって開拓され、その中心地フィラデルフィアはフレンド派(The Society of Friends)の本拠地である。彼の両親や兄弟も熱心なクウェーカー教徒であり、彼自身もその派の学校に通った。しかしウォーフエルの伝記によれば、⁽¹⁰⁾ 家族の中で彼のみがこの宗派に対して批判的で

あった。特に1797年、彼の恋人がクウェーカーでないという理由で母親から結婚を強く反対され、結局破談になってしまったことはこの派に対する彼の態度を決定的なものにしたといえよう。これは彼がこの作品を書く直前のことであつた。従つてこの宗派に対する作者の気持が作品の中に投入されているのではないかという推測はあながち不当ではないだろう。しかもこの宗派の始祖ジョージ・フォックスの言葉“Quake at the Word of the Lord.”は基本的にはセオドアの場合と同じである。つまりどちらも神の顕現を感覚で確認しようとするものである。セオドアが犯した最大の誤りは言わゆる「至福直感」(beatific vision)をこの世に求めたことにあつたし、フレンド派について言えば、神の声と自分の良心にのみに従おうとする信条や生き方は、神の声が聞こえない者にとっては真偽の判定のしようがなく、己れのみを正しいとする独善主義とみえるのも致し方ないのである。この両者を関連づけたいという誘惑に駆られるのは筆者のみではないと思われるのだが、奇妙なことに、このことに言及した評者を筆者は疎閑にして知らない。前述のクラークがこのことを主張しても少しも不思議とは思えないのだが、20世紀のクウェーカーに対する思いやりとか遠慮がこのような解釈を阻止しているのだろうか。確かにこの両者を結びつけることはフレンド派にとっては根幹にかかわる重大問題であろう。セオドア自身は“Calvinistic inspiration”(P. 25)は持っていたが、何か特定の宗派に属していたとはどこにも書かれていない。しかしセオドアにのみ聞こえる神の声は独善という点ではクウェーカー教徒がおののく神の声とそんなにかけ離れたものではないだろう。

III

ブレイエルはカーウィンと同じくヨーロッパ帰りで、次の引用に見られるように、「理性の時代」⁽¹¹⁾と呼ばれる18世紀の旧世界を代表する人物である。

Pleyel was the champion of intellectual liberty, and rejected all guidance but that of his reason. (p. 25)

そして全てを疑いの対象にする。リンジも指摘するように、⁽¹²⁾一連の不可解な出来事に対して正しい推論を下すことが出来るのは、家系上の災厄を免れ、合理的精神に富むブレイエルを描いて他にはいないのだが、その彼もいとも簡単にカーウィンの術策に欺かれてしまつて、その役を果たせない。セオドアが聞いた最初の声は躊躇することなくセオドアの錯覚であると断定するのだが、同じ声がヨー

ロッパに残してきた彼の恋人の死を告げると、その声の正体を見抜こうとする努力をすることもなく、途端に冷静さと陽気さを失い、その後20日以上も自分の家に閉じこつてしまう。その後も彼が見たり聞いたりすることに対して彼が下す判断はすべて誤つたものである。特にひどいのはクララに関するものである。カーウィンを最初に見た時のクララの様子や彼女の肩越しに読んだ言葉、⁽¹³⁾東屋での昼寝などは全て彼女のカーウィンへの愛を表わすものであると独断し、更に、クララの召使とカーウィンとが演じた声を立ち聞きするにおよんで、二人の密通を確信してしまう。そして次のように主張するのである。

My conviction was effected only by an accumulation of the same tokens. I yielded not but to evidence which took away the power to withhold my faith. (p. 135)

確かに器官としての耳の働きは正常であるけれども、見聞きしたその瞬間に(またはいくらかの時間を経て)下す判断がすべて狂っており、その後に関く感覚による証拠も最初の誤りを正すものではなく、逆にその誤つた判断を再確認し、強化するものとしての働きをしている。クララに対する彼の最高の人物評価(PP. 121—2)もこれらの証拠の前には全く役に立たない。その後彼はセオドアが狂人へ変身するのを救うことも出来ず、またクララに対する誤つた確信を抱いたままで、ヨーロッパへ旅立ってしまう。それはとりもなおさず、彼が体現する合理主義、理性、知性、懐疑的精神等が問題解決にとって全く無力であることを示していると言えよう。

クララはこの3人うちではもっとも複雑な人物である。ブレイエルが彼女を“the first of women”と言うように、知性を徳性も高く、非の打ちどころのない女性として描かれている。しかしカーウィンのトリックに欺かれ、外見に惑わされて真相を見抜けないという点では彼女も他の2人と同様である。カーウィンの出現以来、徐々に精神的均衡を失つてゆき、兄の発狂による妻子殺害、ブレイエルの彼女に対する誤解と旅立ち、そして兄が彼女をも殺そうとしたこと等の心痛む事件を相次いで経験して、彼女自身も殆んど絶望の淵に陥り、遂には自殺をほのめかすような状態になってしまう。

しかし彼女は次の二つの点で他の2人とは異なる。一つは彼女の不可解な行動や思いである。これについては後で述べる。もう一つは彼女が不可解な声に対して慎重であるということである。「起つた事件についてさまざまな調査、憶測がなされたが、解決に近づく代りに疑いが増すばかりだった。」(P. 61)とか、「この後に起つた事件によって

はじめて自分の感覚が真実を伝えていたことを疑いの余地なく確信した。」とあるように、聞こえた声に対してすぐに判断をせず、そこに一定の時間をおくだけの心的余裕がある。セオドアは性格的に曖昧をそのままに放っておくことが出来ず、感覚による神の確認をあまりにも強く求めたために、またブレイエルは聞こえた声が恋人の死を告げたことやその後の様々な事実が偶然に一致したために⁽¹⁴⁾、どちらもせっかちに結論に飛びつき判断を誤る。クララの場合は、何回も聞く恐ろしい声の中に混って、自分を危害から護ってくれる声、慈悲深い意図を持った声があることに気づき、声の内容を柔軟に解釈しようとする態度がみられる。ブレイエルがそれまでの彼女を高く評価していたにもかかわらず、偽りの感覚上の根拠に基づいて、カーウィンと密通していると判断したことに対して、クララは切歯扼腕する。彼女はその悔しさを晴らすべく、息せき切ってブレイエルの家へ乗り込むのだが、その行為が「後悔している罪人」としてのものに他ならないと彼から判断されたことを知って、彼女はまたも愕然とする。そして彼女は、ブレイエルが感覚を通してその判断を得たのであれば、それを覆すには言葉による説得は無力であり、「時間による鎮静効果と新たな希望の誕生」(P. 141)を期待する以外にはないと悟るのである。感覚に対する彼女のこのような慎重な態度と心的余裕とが彼女を短慮な自殺から救うことになる。

このようにみえてくると、感覚を発端にして精神的混乱が生じ、誤った判断がなされ、偶然の一致や想像による増幅にも助けられて、その判断が更に強化されるというプロセスが3人の主要人物いずれにもあてはまることがわかる。そしてここにこの作品の全体をカバーするテーマがあると筆者は思うのである。感覚によって誤らされる人間の弱さも勿論このテーマの中に含まれるが、同様に自分の感覚にたいして過剰な信頼を置くことの愚も示されている。次にこの作品に対する作者の意図について述べてみたい。

V

ブラウンはこの作品の随所に脚注をつけている。これは序文(Advertisement)と同様に、作者が直接に作品の中に顔を出していることを意味する。殆んど脚注が短くて簡単なものであるが、腹話術(Biloquium or Ventriloquation)に関する部分だけは詳細な説明がなされている。その一部は次のとおりである。

Sound is varied according to the variations of direction

and distance. The art of the ventriloquist consists in modifying his voice according to all these variations, without changing his place …… Experience shews (*sic*) that the human voice can imitate the voice of all men and of all inferior animals. (p. 198)

これはまさに科学記事である。ここには明らかに作者の意図が表われている。ウィーラント兄妹はどちらも例の声の正体を見破ることが出来ず、その声を超自然的なものであると判断した。しかし作者は、登場人物をそのように描きながら、読者には2人と同様の判断をしてほしくはなかった。一見不可解にみえるこの現象を読者にはあくまで科学的に説明出来るものとして理解されることを望んでいるのである。そのために作者は物語の早い時点で諸々の現象の科学的説明をカーウィン自身に語らせているのである。セオドア家に客として現われたカーウィンはクララ達の問いに答えて、「不思議な声はいつも反響とか管を伝ったとか既知の原理によって説明がつくものである。……人の声をまねる能力はありふれたものであり、キャサリンの声を岡の籠で使うことはまったく容易である。」(p.p. 74—5)と答えている。これはトリックの仕掛人から読者への前もっての種明かしであり、事態を科学的に冷静な目で見てもらいたいという要請でもある。同様の主旨は序文にも次のように述べられている。

It is hoped that intelligent readers will not disapprove of the manner in which appearances are solved. (p. 3)

そして更に念をいれて、上述の脚注をつけて超自然的な声などありえないことを強調しているのである。

ウィーランド兄妹が超自然が介入したと思っているもう一つの事件、つまり父の死にも同じような描出手法が採られている。幼年期の2人には奇怪で不可解な死に思えたのだが、彼らの叔父の目にはそれは十分に説明のつくものであった。火事は自然発火によるものであったし、父は誰かに重い棍棒でなぐられていた。医者でもあるこの叔父の判断は客観的であり、「これらの事実の真実性は疑いようがない。叔父の証言は特に信憑性がある。なぜなら叔父ほど懐疑的な人はいないし、また彼の信念は自然の根拠に基づいているからである。」(p. 19)とクララ自身が認めている。それにもかかわらず、ここでまた作者は二番目に長い脚注をつけて、このような症例は「医学ジャーナル」に載っているから読者に見るようにと勧めているのである。この作品の中で読者の注意をもっとも惹きつけるこれらの事件に作者が二重三重の説明をするのは、その科学性、合理性を読者に印象づけたかったからに他ならない。更に序

文にもあるように、単なる“sources of amusement”として作品を読んでもらいたくなかった。ゴシックの手法や感傷小説の要素を用いて多くの読者を獲得したいが、同時に“usefulness (p. 3)”を持ったものとしてこれを読むことを読者に期待したのだと理解出来る。このような用意周到な構成の背後には作者の目的・意図があると考えねばならない。

ブラウンは超自然的存在を認める人物を作品の中に登場させたが、作者自身がその存在を認めていたのではない。従って例えば次のような主張は筆者には受け容れられない。「さまざまに認識される超自然力が現実世界に幻の如く実在し、人間の生を脅かしているとブラウンは認識したのである。こうした認識にもとづき、超自然現象が日常的合理的現実世界に侵入し、本来、非現実であるべき現象が実在するところにブラウンの怪異な世界が成立したのである。」⁽¹⁵⁾超自然力がこの現実世界に存在し、それに人間が振り回される図は、ウォルポールの『オトランド城』とまったく同じ次元のゴシックの世界であるが、そのような読みは作品の単純化、軽薄化につながるものである。作者ブラウンはまさにこれとこれと正反対の主張、つまり自然界に起る物理的現象に超自然的なものはないということを述べているのである。そして一方でそのことを十分に強調しながら、他方では人間そのものの複雑さ、神秘さが例示されるのである。

主人公のクララはカーウィンの声を一言聞いた瞬間からそれまでの自分を見失ってしまう。

When he uttered the words “for charity’s sweet sake,” I dropped the cloth that I held in my hand, my heart overflowed with sympathy, and my eyes with unbidden tears. (p. 52)

その声の調子は彼女を涙で溶かしてしまうようであったが、そんなことは他人様だけではなく、自分でも信じられないことだと言う。そして彼の姿を一瞬目にとめると、その姿に圧倒されてしまって、その顔をスケッチせずにおれない。そして翌日は一日中そのスケッチを眺め、物思いに耽るのである。これをカーウィンへの恋の兆候であると読むなら、

The ardent Clara sees in almost every unmarried man a potential suitor.⁽¹⁵⁾

というウォーフエルの指摘は正しいと言えよう。クララ自身は「どのような結論を出されても自由である」と言って読者に判断を任せているが、実際には彼女はこの時点でブレイエルを密かに恋しているのだから、カーウィンへの一

目惚れとは考えにくい。いずれにしろ、夜になっても物思いは続き、兄とその子供らの姿を思い浮べ、死を必定と思う。そして「なぜにわたしの心は不吉なわびしい思いに耽っているのか。なぜに私の胸は吐息に波打ち、目は涙にあふれるのか。今過ぎた嵐は私にふりかかってくる破滅の兆しではないのか」(p. 54)と言う。ここで注目すべきことはクララ自身の心の動きの不可解さであり、その思いが来るべき悲劇への的確な前兆となっていることである。同様のことが数週間後に東屋で眠り込んだ時にみた夢についても言える。夢の中で兄は彼女を崖の向う側へ手招きし、もう一步のところまで彼女を死の淵へ落とそうする。彼女はこの夢によって兄が自分の生命を脅かす敵であることを知る。この不可解な夢も真実を伝えているのである。その後には彼女自身が語る自分の思考や行動は全く不合理、不可解である。

Ideas exist in our minds that can be accounted for by no established laws. (p. 87)

このように述べて人心の動きが科学の領域を越えていることが示される。更に「わたしに行動を強いるものは乱心に違いない」とか「行動と信念が戦争状態にある」とあるように、行動と思考が切り離されてしまっ、自分でとる行動が自分自身でも理解出来なくなってしまう。物置部屋に邪悪なものが隠れているという信念が生じていながら、逃げようという衝動に駆られることはなく、その部屋の門をためらうことなく上げるのである。彼女のこのような行動は、夜の暗間に包まれ、極度の恐怖と緊張に身震いしながら、「無意識の衝動」に駆られて起した行動であるが、人間に内在する神秘性や複雑さを読者に十分に印象づけるものである。

人間生活にふりかかる物理的現象は表面上の複雑さや奇怪さにもかかわらず、科学的に解明出来るものである。しかし人間の内的および外的行動はあまりにも多様で常軌を逸しており、科学の力が及ばない領域であることが示されている。そしてこの両者を並列的に対照的に描写することによって、結果的には後者を際立たせている。先に引用したクララの言葉「人間には既存の法則では説明出来ない思いがある」は作者がこの作品でもっとも強調したいと思っているテーマであると思われる。だからこそ作者は序文の中で自分自身を「精神を描く画家」と言い、その任務を「人間精神の隠れた動きや時折の倒錯をもっとも啓発的で忘れがたい形で示すこと」とであると規定しているのである。そして更に言えば、人間の心の深奥やその神秘、複雑さ等に焦点をあてたと言う点において、作者ブラウンは

半世紀後におこるアメリカ・ルネサンスの先駆者であると
 言えよう。

V

ジョン・ロックの *Essay Concerning Human Understanding* (1690) から始まった経験論的認識論はハートレー (David Hartley) によって心理学の基礎に据えられた。その考え方は啓蒙運動という時代思潮の中心的思潮となって新生アメリカを支配していたと言えよう。当時のアメリカの学問、政治、哲学等の思想動向の詳細はリンジの説明に譲るが、⁽¹⁷⁾ その中心は合理主義であり、科学と経験の尊重であったと言えよう。啓蒙運動はアメリカに渡ってもベンジャミン・フランクリンやトマス・ジェファソンらの良き理解者を得て、またアメリカ国民の実用主義的合理主義や事実尊重主義の気質にも助けられて、旧世界に劣らぬ熱意で受け容れられた。それは神に対する態度にも影響を与え、科学の力によって神のはかりごとを知ろうとする理神論的考えも大いにもてはやされた。そして自然界の全てを科学的に解明しようとする気運は、次には当然ながら人間の全てを、肉体の構造のみならず内面の心理までもも研究対象にした。その心理学はロックの流れをくむ *Sensation-al Psychology* と呼ばれるものであった。

ブラウンは首都フィラデルフィアやニューヨークで当時の思潮に容易に近づける所にいたし、積極的にこの種の集りに参加して吸収した。またスミス (Elihu Hubbard Smith) や多数の友人達もこの進歩思想の信奉者であった。従ってブラウンがロックの思想やハートレーの心理学を熟知していたことは疑いを入れない。感覚と判断についてクララは次のように述べる。

The will is the tool of the understanding, which must fashion its conclusions on the notices of sense. If the senses be depraved, it is impossible to calculate the evils that may flow from the consequent deductions of the understanding. (p. 35, underlines, mine)

文章が現在形で書かれていることから推測されるが、⁽¹⁸⁾ これは語り手のみならず作者自身の考え方を示すものであろう。

このような科学思想にとりかこまれた状況の中でブラウンは執拗に感覚にこだわり、感覚による誤りを例示した。しかも最新の思想を抱き、高い知性や徳性に恵まれた3人の人物を登場させ、この人間の属性も問題解決にとって無力であることも示した。ここで示されているのは人間全般

にとって恐るべき内容を含んだものである。つまり我々人間は目や耳で得た情報を、大抵の場合、瞬間的にまた衝動的に判断してしまう。クララはそれに対しては幾分慎重であったが、兄やブレイエルは正にその通りであった。彼らにとっては例の声はキャサリン以外の声ではあり得なかった。感覚に絶対的自信を持っていたがために、その判断は確信に変わってしまった。この瞬間的、衝動的判断と、ある光やある声を神のものであるとする判断との間の距離はごくわずかであって、特にセオドアのように、合理的思考過程によってその結論が支えられている場合には、感覚による判断から幻覚が生ずるのは殆んど必然的であると作者は述べているのである。それは人間が持つ弱点に対する作者の忠告とも読めようが、同時にそれは当時の感覚重視の心理学への反撥であるとも言えよう。いや少くともボロシも指摘するとおり、⁽¹⁹⁾ 知識を得る水路としての感覚に疑いを提起して入る。同時にそれは、人間の心の中までも科学によって解明出来ると考える「楽観的心理学」への異議の申し立てでもあった。⁽²⁰⁾ 声を不可解な物思いや夢に対比させ、前者による判断を全て誤ったものにし、逆に夢や物思いに真実を伝えさせるという手法によって、作者は前者を否定すると同時に人間の神秘性、不合理性を浮き立たせていると結論づけることが出来よう。

バリントンのようにリアリズムをアメリカ文学の主流であるとする批評家にとっては「ウィーランド」はアメリカ文学史を汚す目障りな「浮きかす」(“dross”)にみえるだろうが、逆にロマンティズムを重視する者にとってはこの作品がアメリカ小説の始まりであると言えなくはない。そしてチェイスの主張のとおり、アメリカにおいてはロマンスを主流とみる方が優勢なのである。⁽²¹⁾ とすれば、この言わば原初作品をどのように解釈するかは文学史の上でも相当に重要な問題であろう。この作品を恐怖、おぞましき、戦慄等の感情をかきたてることのみを主眼としたゴシック・ロマンスとして読むか、合理主義を称揚する作品として読むことが出来るか、または筆者のように、感覚心理学や科学万能主義に対する作者の反発をそこに読みとるか、その読み方次第で作品のみならず作者の評価も変わってくるだろう。ブラウンの他の作品との比較検討をすすめながら、この作品の再評価を今後の研究課題として残したい。

注

- (1) C. B. Brown, *Wieland & Memoirs of Carwin*, Kent State Univ. Pr., 1977, p. 76.
以下この作品からの引用は全てこの版による。頁数はカッコ内に数字で示す。
- (2) チェイスはカーウインを“real hero”であると言っている。それはこの作品を純然たるゴシックとして読もうとするものであり、筆者の主張とは相容れない。
Richard Chase, *The American Novel and Its Tradition*, Gordian, 1957, pp. 32-3.
- (3) Donald A. Ringe, *American Gothic*, Univ. Pr. of Kentucky, 1982, p. 41.
- (4) Larzer Ziff, “A Reading of *Wieland*,” *PMLA*, LXXVII (1962), p. 51.
- (5) 幼児体験が与える印象の強さは作品の冒頭 (p. 5) に述べられている。
- (6) Chase, p. 23.
- (7) Ziff, p. 56. なおマンリーはこのことについて、作者はセオドアよりもクララの狂気に関心があったのだからこれで良いのだと言う。William M. Manly, “The Importance of Point of View in Brockden Brown’s *Wieland*,” *American Literature* XXXV (1963), p. 318.
- (8) David L. Clark, *C. B. Brown: Pioneer Voice in America*, AMS Pr., 1952, p. 169.
- (9) 八木敏雄の「神と悪魔の逆転劇」という読みも基本的にはこれと同主旨である。「城と眩暈」(国書刊行会, 1982) p. 165.
- (10) Harry R. Warfel, *Charles Brockden Brown*, Octagon Books, 1974, pp. 39, 96-7.
- (11) Thomas Paine, *The age of Reason*, 1974.
- (12) Donald A. Ringe, *C. B. Brown*, College and Univ. Pr., 1966, p. 31.
- (13) この行為が感傷小説の一つの特徴であるとデイヴィドソンは指摘する。
Cathy N. Davidson, *Revolution and the Word*, Oxford Univ. Pr., 1986, p. 223.
- (14) 偶然の一致という視点でこの作品を捉えた研究もある。
Cf. Normans S. Grabo, *The Coincidental Art of C. B. Brown*, The Univ. of North Carolina Pr., 1981.
- (15) 神原達夫「アメリカ文学における怪異」(荒竹出版, 1978) p. 31
- (16) Warfel, p. 102.
- (17) Ringe, *American Gothic*, pp. 1-12
- (18) 現在形で書かれた箇所は他にも随所にみられるが、概して、一般的事実としてまたは作者の読者への忠告か作者自身の主張として読むことができる。p. 87の引用も同様である。
- (19) Beverly R. Voloshin, “*Wieland*: Accounting for Appearances,” *New England Quarterly*, Sept., 1986, p. 344.
- (20) Ringe, *C. B. Brown*, p. 35.
- (21) Chase, p. 37. なお「浮きかす」はチェイスが使っている言葉であって、バリントンは実際には“by-product”と言っている。
Cf. Vernon L. Parrington, *Main Currents in American Thought*, Vol. Two, Harvest Books, 1927, p. 182.